第 6 回「新しい北東アジア」東京セミナー

日　時：2005 年 7 月 21 日（木）午前 9 時 15 分～11 時 30 分
場　所：経団連会館 10 階 1002 号室（千代田区大手町 1-9-4）
テーマ：ロシアのアジア民族から見た日本とロシア極東の将来像－モンゴルの文化的・地域的多様性と日本との交流可能性－
講　師：ゲンナディー・アイダエフ（ロシア・ブリヤート共和国ウランウデ市長）
D. バッチジャルガル（駐日モンゴル国大使館経済担当参事官）
ライサ・プシェニチニコワ（ロシア国立東シベリア文化芸術アカデミー総長、ブリヤート共和国議会議員）
討論者：窪田新一（笹川平和財団事業部上席研究員）
荒井幸康（北海道大学スラブ研究センター21 世紀 COE 研究員）
司　会：中村俊彦（ERINA 広報・企画室長）

ゲナンディ・アイダエフ

「神秘の湖」バイカル湖沿岸のシベリアの都市の市民を代表し、皆様の前で発言する機会を与えてくださったことに厚くお礼申し上げます。

北はバイカル湖とレナ川沿岸から南は果てしないハルハ・モンゴルの大草原まで、西はムンコ・サルディク山の青い峰まで、東はヤブロノブイ連峰まで広がる領域にブリヤート民族は暮らしています。モンゴル系民族であるブリヤート民族は、環バイカルで形成されました。バイカル周辺に居住するモンゴル民族については、マルコ・ポーロも旅行記の中で記しています。歴史上登場するブリヤート系種族は多種多様ですが、17 世紀にロシアの

役人たちがこの土地に来て「ブラート（兄弟たち)」と呼ぶようになりました。その時点でモンゴル人とブリヤート人を別のものとみなしていたことが分かります。ブリヤート人は牧畜を営みながら領域内を年 2 回定期移動していました。ブリヤート人こそが原モンゴル人と呼べる民族と言えましょう。

日本とロシアは隣人であり、共に「G8」のメンバーです。互いの連携の重要性を両国は認識しています。ロシアの著名な学者であるベルナツキーは 20 世紀初頭の時点で「ロシアの未来はそのアジア地域の資源・経済の発展に大きく依存し、その開発はこの地域の国々との協力なくして不可能であろう」と力説しました。福沢諭吉も、日ロ協力の重要性を強調していました。共通の価値の創造が見え始めた今日、将来的な協力の可能性は計り知れません。

例えば、ブリヤート人女性が自分の街で日本人捕虜の作った記念柱を目にし、家族に買ったサワークリームの瓶を彼らに差し出したというエピソードがあります。この目撃者の談話のみならず、第二次世界大戦後に虜囚の境涯に苦しんだ日本兵捕虜収容所に残された数百の墓もまた、あの辛い時代を想起させます。ウランウデ市民はこれらの墓の世話をし、記憶を風化させないようにしています。

歴史を振り返ってみると、20 世紀初頭、ヨーロッパを目指す日本人旅行者が、シベリア横断鉄道によって発展したベルフネウジンスク（ウランウデの旧称）を見たのが、彼らのロシアに関する第一印象でした。さらにそれ以前、当時の大動脈だった玉・絹・茶の道を行く中国、韓国、日本の隊商がバイカル湖周辺の諸都市及び町村を通過しています。

最近、ブリヤート人と日本人にはもっと物理的な共通性があることが明らかになりました。日本列島のある島で、1 万年以上前の日本最古の住民の墓が発見されました。遺骨の DNA を調査し、他のアジア民族の特徴と比較した結果、それに最も近い遺伝子データが現代のブリヤート人、特にブリヤートのキジンギンスキー地区住民から見つかりました。この発見によって、「日本人の遠い祖先の一部は、新石器時代に大陸から日本列島に移住した。しかも、バイカリ以東の大草原を移動した」という仮説を十分な根拠をもって立てることができました。ブリヤート人と日本人は、かなり遠いつながりかもしれませんが親戚なのです。

ウランウデ市について少し紹介しましょう。市の歴史は 1666 年に始まり、「ウランウデ」という名称は 1934 年から使われています。ウランウデ市の人口は 2005 年 1 月 1 日現在で約 38 万人です。平均年齢は 2002 年の国勢調査によると 34 歳です。

1998 年～2003 年、ウランウデ市は経済危機を克服し、大部分の産業がダイナミックな発展を見せました。2001 年、ウランウデ市は 2002～2004 年中期社会・経済発展計画を策定し、その結果、実質賃金が 82.1%増、工業生産高が 97・7%増、固定資投資額が 120%増を記録しました。不払い問題はほぼ克服され、市の歳入は 5 倍に成長しました。小売の売上高は 48.7%伸び、社会的状況が改善されました。社会・経済発展計画の基礎は、市民の需要を満たすための環境整備であり、経済発展の出発点は人々の需要にあります。

また、社会・経済発展問題の解決は、隣接地域との長期的なパートナー関係の構築なくして不可能です。ウランウデ市は、モンゴル、日本、韓国、中国、台湾の 10 都市と友好姉妹都市関係を樹立して、対外関係の強化に努めています。特に重視しているのが文化交流の強化です。

ブリヤート共和国の外国貿易取引は、2004 年末現在で約 4 億ドルでした。貿易黒字は約 3 億 5,000 万ドルで、輸出高増大の要因は機械製品・食料品・石炭供給の成長でした。原木も幅広い地域に輸出され、内 3%は対日輸出です。広報活動も功を奏し、日本の企業や駐ハバロフスク総領事一行が訪問するなど、貿易・文化交流の基盤をつくっています。

ブリヤート共和国では露天掘りのトゥグヌイスキー炭田の石炭輸出量を年間 250 万トンまで増加する計画があります。石炭輸出はアジア・太平洋地域、特に日本、中国、韓国に対して行われ、2003 年時点で約 180 万トンの石炭を輸出し、約 200 万トンをロシア国内市場に供給しました。同炭田はロシアの対日石炭供給の 4 分の 1 余を占めています。

2003 年以降、日ロ貿易が急成長し始めています。2003 年の両国間貿易高は 42%成長して約 60 億ドルとなり、この内対日輸出は 29%増の 42 億ドル、輸入は 86%増の約 18 億ドルになりました。2004 年には、2003 年比で 30%成長し、近年で最高水準の 78 億ドルに達しました。

ロシアの主要輸出品目は依然として原料です。ロシアの対日輸出の 9 割余が、非鉄金属及び貴金属（輸出高の 34%）、石炭・石油及び石油製品（21%）、水産物（25%）、木材(14%)の 4 つの主要商品グループに属しています。日本からの輸入品目は主として機械製品（自動車、道路建設機械、家電製品、通信機器）で、全体の約 85%を占めています。

今後、日本からの輸入はより成長が見込まれ、2 国間貿易はよりバランスの取れたものになります。3～5 年間に両国間貿易は 100 億ドルを越えと予想されています。

近年、日ロ間投資協力でも良好な傾向が見えます。2004 年末時点で、日本は対ロ累積投資額で第 8 位、直接投資額では第 6 位を占めました。因みに日本の対ロ経済累積投資総額は、2005 年 1 月 1 日現在で 19 億ドルに上っています。

日ロ経済関係における戦略的協力分野は、エネルギー産業です。エネルギー資源の採掘、加工、輸送分野における巨大プロジェクト（例えばサハリン 1、2、サハリン～日本間のガスパイプライン建設計画、太平洋石油パイプライン建設計画など）こそ、日本経済界の注目を集めています。日ロ経済協力上の課題は、東シベリアから太平洋に至るパイプライン・ルートを最優先で確保していくことにあります。

日ロ間の観光交流については、昨年の統計データによれば、ロシアを訪れた日本人の数は 7 万人、日本を訪れたロシア人の数は 4 万人でした。ブリヤート共和国への観光ルートの開拓によって、この数値の拡大を図りたいと思っています。

イルクーツク州のコビクタ・ガス・コンデンセート鉱床開発プロジェクトの F/S がなされています。温暖化ガス排出量削減を目指す京都メカニズムに基づいたロシアの燃料・エネルギー企業近代化プロジェクトの F/S.作成作業も進んでいます。極東の炭田開発、サハ

リン・日本エネルギーブリッジ創設、観光開発への日本参加など、日本の資金・技術協力を活用したパイロット・プロジェクトの可能性も検討されています

日ロ両国が近年なし得たことは少なくありません。中でも平和条約締結への活路を見出すための共同努力を継続し、全面的関係強化を通じた創造的パートナーシップを目指して行動するという共通の課題が定められていることは重要です。日ロ協力行動計画（2003 年 1 月）では、両国が日本とロシア極東・シベリア地域との貿易・経済交流及び協力の拡大を支援することや、日本の都道府県とロシア連邦構成主体の間及び両国都市間の交流の充実に関する問題の検討を含め地域レベルでの交流の進展を図ることが明記されています。

ウランウデ市はこの精神に則った対日交流を数多く実施しています。第 89 番学校と共和国立ブリヤート第 1 高等中学校で日本語教育が行われ、第 56 番学校の教育計画には、「日本の民話・寓話」、「日本の芸術」、「茶道」、「日本の宗教と信仰」、「日本の伝統工芸」、「日本の文化儀礼」などに関する授業が盛り込まれています。

ウランウデ市と留萌市は 2002 年、姉妹都市提携 30 周年を祝いました。これまでの 30 年間、代表団の交換、専門家やアーティストの交流が行われ、当市では毎年、日本映画フェスティバルが開催されています。

山形市とは 1991 年に姉妹都市協定を調印し、以来、年々交流が拡大しています。教育分野では、ウランウデ市がイニシアチブをとり、ブリヤート国立大学で日本語を学ぶ学生のために山形市長から日本語教科書や日本の歴史・文化に関する教材を贈られました。

沿海地方ウラジオストク市及び日ロ協会と共同で、日本の諸都市をクルーズするなどの「国際青少年芸術フェスティバル」が組織されています。今年は第 20 回日ロ沿岸市長会議（金沢市）を記念して開催される第 2 回国際フェスティバルに、ウランウデ市の子供たちのグループ「ナラン」がガラコンサートや歌、絵画、ダンスのコンクールに参加します。

また、日本の姉妹都市との交流を促進する目的で、夏休みに日本の子供たちをウランウデ市とバイカル湖畔に招くプランを、在ハバロフスク日本国総領事館を通じて提案しています。

日ロ関係の発展には限りない可能性が秘められています。しかし可能性を実現していくには一層の努力が必要なことは言うまでありません。

D. バッチジャルガル

ツェンゲル議員が都合により出席できなくなり、代わって報告します。

北東アジアはきわめてポテンシャルの高い地域です。日本などの技術・経済大国、地下資源・鉱物資源に恵まれたロシアやモンゴルがあり、技術プラス鉱物資源のポテンシャルの高い地域です。残念ながら政治的な問題があり、全体的な発展がスムーズに進むことが難しい地域でもあります。

この地域はモンゴル系民族が多い地域で、モンゴル国だけでなく、ロシアにブリヤート共和国、中国に内モンゴル自治区があります。中央政府が努力しにくいことを地方が努力

していくこと、それが地域への一つの貢献になります。

モンゴル政府としてはグローバリゼーションの時代、経済開放に力を入れています。特にモンゴルの北の国境アルタンブラグ、南の国境ザミンウドに自由貿易地帯を設置しました。

アルタンブラグはブリヤートに隣接し、双方の経済交流に大きな役割を果たすものと思います。人と物の流れを自由化することが地域経済を活性化し、特に観光は実現可能性の高い分野です。例えばバイカル湖とホブスゴル湖との間の観光商品などが期待されます。

ライサ・プシェニチニコワ

ブリヤートは以前から様々な文化が深く絡み合ってきた地域です。数千年にわたって異なる考え方の民族がこの地域を経由して西から東へ、また東から西へ移動し、その中で独特な関係や伝統が生まれ、多民族的な文化を形成する基盤ができてきました。このような多民族文化のトランジットは、ロシアの地政学的な利害を実現するためのブリヤート共和国、その文化及び伝統の重要性の根本的な要素です。それゆえに、ブリヤート人の文化・伝統の研究、それらの現代世界における役割の理解は非常に重要です。

ここ 10 年間、こうした分野に関する研究がたくさん行われてきましたが、多くの研究は狭い範囲、つまりブリヤート人が住んでいる地域に限られています。他方、文化学は文化・伝統をより広く、戦略的に把握するものです。ほとんどの研究者は、人類の今後の進化が文化及び文化学の発展、そして「新しい人間」プロジェクトの進展に大きく影響すると考えています。

文化への科学的なアプローチは、多数存在する文化が質的に異なっており、それぞれユニークなものであることに基づいています。統一された文化はなく、各時代、各民族が独特の文化を持っています。科学は文化的な複数主義を認め、文化の役割、特に伝統における役割に関するかつての考え方を根本的に変えてきました。ロシアの学者ビブレルの「科学から文化の論理へ：21 世紀への 2 つの入門」という本では、20 世紀末から 21 世紀の初頭にかけて社会的、精神的、歴史的な大変動があり、それは人間の生存が全体的に文化へ重心を移している結果であろうということが強調されています。

その他数多くの論文及び予測から、国や民族の将来は文化及び伝統の発展シナリオに大いに左右されるという結論が導かれます。このようなシナリオを作成することは非常に重要です。なぜなら、グローバル化が伝統や文化に非常に大きな影響を与えているからです。ロシアの有名な哲学者及び政治家であるドゥギンの「政治の哲学」という論文には、現在の政治事情の特徴が挙げられています。現代において双方向的な情報ネットワークが発展した結果、仮想的なポスト政治が現れてきたというものです。バーチャルなものが現実的なものを駆逐し、その結果、いわゆるメディアクラシー社会が形成しつつあります。だからこそ様々な民族の文化・伝統の維持、その近代化の問題をどう解決していくかが非常に重要なものになってきています。

文化・伝統に関する一連の研究調査の結果から、常に変わりつつある世界で人間の共同体が生き残るための主要なメカニズムは何よりも文化的な伝統であると言えます。伝統は習慣、儀式などの人間活動を含む総合的な現象だからです。

文化的な伝統は、人種、民族など人間の共同体の遺伝的な進化プログラムの役割を果たしてきたと言われます。文化的な伝統の変動とは、ある社会的な固定観念がなくなり、新しい固定観念が生まれる過程です。そして、伝統と革新が相互に起因していることを強調すべきでしょう。革新が文化的な伝統の固定観念の源であると同時に、固定観念が革新のために必要な前提条件であるのです。

現代の世界でも、文化的な伝統は、社会に必要な安定性を確保する多面的なメカニズムであることを忘れてはいけません。このメカニズムがなければ、人間の社会的な活動は不可能です。

また文化学の専門家は、文化的な伝統の中に、人間が生き残り、価値を創造することを可能にする具体的なエネルギーや情報のパワーが内在すると考えています。社会の発展が可能かどうかは、我々の伝統及び文化全体に対する態度により決まると言う事もできます。文化・伝統の重要性を過小評価すると、改革の質が低下し、近代化が前進ではなく、発展を阻止するものになりかねないのです。

また現在起きている文化の変化は、儀式（儀式的モデル）、祝祭（祝祭的モデル）、劇場（劇場型モデル）、神話（神話的モデル）などの「古代的で新しい人間行為モデル」の形成につながっています。根本的な文化が変化していく過程は、多数の民族の行為、感覚、感情、自己顕示など、すべてのモデルを把握していると言えます。だからこそ、古代文化に隠されている（記号化されている）知識の解読が必要になってきます。

現在、文化的伝統はどうなっているか、文化・芸術の発展にはどんなシナリオがあり得るかをみてみましょう。文化的伝統及び文化学をどうやって社会経済問題の解決に利用できるかということを理解するに当たって、最も大きな妨げになっているのは、文化への博物館的なアプローチ、つまり過去のみを考えるアプローチです。多くの専門家は、科学全体が将来の社会発展に大きな役割を果たすと強調していますが、文化学の重要性はまだ十分に理解されていません。文化学がただの飾りであり、社会経済発展を予測・計画するときに無視してもいいという考え方が圧倒的である限り、社会発展は最小銀にとどまるでしょう。また、現在の時代的な変動により、文化的伝統の条件が変わってきていることも理解すべきです。文化が遺産や伝統を現実化していた時代と異なり、現在は文化自体の中にこれまでの蓄積や構造的に異なる伝統が同時に存在しています。また、文化的伝統が効力を持つ期間が短くなってきた結果、社会が生活環境に与える影響が少なくなり、逆に環境が社会を混乱させる可能性が高まっています。社会が発展する上で文化・伝統が持つ戦略的な意義を改めて強調したいと思います。

現代の文化人類学からブリヤートの文化的伝統を見てみましょう。ブリヤートの最も重要な伝統としては、環境に関するものが挙げられます。自然との調和、自然への畏敬の中

に、自然を合理的に利用する秘訣があります。その中に、自然について、精神的な文明の発展のメカニズムについて、生命力、独特な情報空間などについての知識が蓄積されているわけです。

もう一つの根強い伝統が、天と年長者への崇拝です。ここでは行為や生存ルールを決めるタブーが形成され、行動規範となってきました。狩猟、漁業、農業、建設、商業、医療などがうまく行くために、精霊に贈り物を上げ、善を信じ、多面的な伝統が形成されてきました。

現代のブリヤート人の生活で大きな意味を持つのが血縁、特に先祖と関わる伝統です。また、天地、生命、人間の謎についての古代知識を吸収してきたブリヤートの宇宙観に基づく伝統も興味深いものがあります。最も重要なのは、これらの伝統がすべて民族を維持し、生き残るためのものであることです。

世界のゲノムというものがあり、それは世界の発展を決める 30 の暗号を含むエネルギー・情報パッケージであり、道徳性、精神性、教養、母なる大地を大切にする心など、個々の民族の文化的伝統に秘められた人間の高い文化と関わっています。今日、人間の潜在能力の開発が大きな動きとなっています。プーチン大統領が 2000 年 9 月に開催された国連のミレニアムサミットで、「我々は文化及び伝統の豊かさを基盤にして平和、繁栄、安定、安全への道を歩むべきである」と強調したのも偶然ではありません。

窪田新一

私は 1983 年から 86 年まで内モンゴルにいて、中国の農地改革の歴史を研究しました。その後ベルリンの壁が崩れる頃、JICA にできたモンゴル政策支援委員会のメンバーとして活動しました。したがって私の話は中国の内モンゴルとモンゴル国に両方から見た話になります。

ブリヤートが歴史的に北東アジア、極東し練りあの経済活動・流通分野で地域的に重要な役割を果たしてきたことについては、アイダエフ市長と考えを同じくするものです。発言にあった「Tea Road」（中国の茶がモスクワへ行く道）におけるキャフタの果たした役割は、キャフタの博物館を訪れると直ちに理解することだと思います。この地域が経済活動の発展に重要な地理的な意味を締めています。内モンゴルにおいても同様に、東西の大きな文明の間において、流通を促進させうる役割を果たし、これからも果たしていくことは間違いありません。現在においても、1990 年以降はロシア、モンゴル、中国はこの地域の経済活動の円滑な発展に寄与する政策をできる限り採択してきました。貨物の流通増加の現状、今後の増加予想に関する ERINA の分析に基づけば、この地域の経済活動の密度はますます濃度を増すものと考えられます。

1994 年には、この地域の経済活動促進のため、ウランウデ、ウランバートル、フフホトの商工会議所が協定結び、共同して情報交換、経済協力に努力してきました。しかしながら、この地域への日本の投資は決して盛んではありませんでした。太平洋石油パイプライ

ンが今後の投資増加につながるのではないかと推測されます。

日本海側の都市が多いかと思いますが姉妹都市交流があり、それに基づいて観光交流があります。この地域全体の観光開発が今後も重要な位置を占めることは間違いないと思いますが、姉妹都市交流だけでなく、太平洋側を含めた日本全体をターゲットにした動きは、モンゴルでもブリヤートでも、まだ不十分ではないでしょうか。この点、中国の内モンゴルはかなり違った様相を示しています。地方政府の、地方の開発、地方政府同士の交流、経済協力、中国では姉妹都市交流を中心に盛んになりました。今後の発展が期待されます。

かつて交流を阻んでいた安全保障上の問題は影を潜めつつあります。領土問題、平和条約の締結などの懸案は、相互において実態が明らかになりつつあり、如何に解決するかという課題を地域の人が共有している点が過去と大きく異なると思います。この点を起爆剤として、地方相互の経済交流が進むことが期待されます。

荒井幸康

私は北海道大学スラブ研究センターの研究員として、主にロシアにおけるモンゴル民族の現代史を研究しています。ここで私はアイダエフ市長のお話を受け、ブリヤートに関してすこしお話をさせていただきたいと思います。

ブリヤートという名前を私が知ったのは、子供のころにさかのぼります。小学校のころに読んだ絵本に、シベリア・ロシアの少数民族を紹介するものがあり、ブリヤートに関する紹介もありました。ブリヤート人はロシア人との最初のコンタクトのときにロシア人に非常に親切にしました。だから、ブリヤート人は兄弟のようだということで兄弟という意味のロシア語、「ブラート」で彼ら名づけたのだと書いてありました。それは私が、歴史上さまざまな民族同士が戦いあっているということを知り始めたころでしたので、最初から他人に親切な人々としてブリヤートという名前は私の記憶に非常に強烈に刻まれました。ブリヤートという名前の起源については諸説あり、残念ながら、ロシア語の兄弟という意味からきたという説はあまり支持されている説ではありません。

アイダエフ市長が述べたとおり、われわれ日本人の DNA に一番近い DNA を持っているのはブリヤート人です。実際、ブリヤート共和国のあちこちを歩くと、日本の芸能人の方々や自分の親戚や友達に似た人々に会うことがよくあります。以前、ウランウデの文学博物館で学芸員をしていらした方はあまりにも女優の野際陽子さんに似ていましたので、写真を撮って、日本の友人に見せて歩いたことがあるほどです。ですから、ここにいる人々が日本人と血を分けた兄弟という説もうなずけてしまうわけです。

そんなブリヤート人は現在、ロシア、中国の 3 地域に住んでいます。これらの人々に共通なのは、もともとバイカル湖の東西の広い地域の出身であるという記憶です。1689 年のネルチンスク条約や 1727 年のキャフタ条約により、シベリアにおけるロシアと清朝との国境が画定されます。清朝の支配下に入った南のモンゴルと、ロシアの支配下に入った北のブリヤートとの間には、国境線が引かれたわけですが、さまざまな理由で国境線を言った

り来たりする人がいました。それが落ち着き、ロシア側に入った人たちは次第にブリヤートという名前を帯びていきます。

18 世紀以降、ブリヤート人が再びモンゴルや中国に国境を越えて向かうのは、ブリヤート内の内部抗争やロシア人移民者との関係など、さまざまなものがあります。もっとも多くのブリヤート人がロシアを去る原因となったのは、ロシア革命とそれに続く内戦の混乱を逃れるためでした。モンゴルに向かったブリヤート人の中には、そのように内戦を避けた人のほかに、自らの意思で向かった人たちもいます。1911 年、辛亥革命と共にモンゴルにも独立の気運が高まりますが、これを助けるために渡った人たちです。彼らはロシアで教育を受け、技術を学んだ人たちで、それをモンゴルで生かそうとしました。

今日のモンゴルにおいても、ブリヤートは非常に重要な人々であることは間違いないと思います。その一つの例として、今年 5 月のモンゴル大統領の結果、当選したエンフバヤル氏はブリヤート系であることを付け加えたいと思います。

モンゴルとロシアの間のブリヤート人の行き来は比較的自由にできたと思いますが、中国とは中ソ論争の中で国境が閉ざされたまま行き来が難しかったようです。ゴルバチョフ期にようやく中ソ国境が正常化し、国境が開かれました。中国に住むブリヤート人のかなりの数が 1990 年前後に自分たちの故郷だった土地を訪れ、移住を決めました。残念ながら多くの人がロシアでの生活に適応できず中国に帰っていくわけですが、70 年間のソビエト政権の間に文化的な遺産を失ったロシアのブリヤート人たちにとって、文化を復興しようとするときに中国のブリヤート人に保たれていた文化遺産が大きな役割を果たしたと言われています。こうして現在、ブリヤート人たちはロシア、モンゴル、中国に自らのアイデンティティを保ちつつ根をおろしています。最近は 3 カ国のブリヤート人たちの交流も盛んになっています。

さて振り返って日本とブリヤートの関係を見ると、実は遠いようで近いものであることがわかります。ウランウデには革命の記念碑があります。そこにはさまざまな言葉で革命のために亡くなった人々をたたえる文字が刻まれておりますが、日本語もあります。誰と特定はできないのですが、ウランウデでの革命に何らかの形でかかわった日本人がいたのではないかと思われます。

1919 年から 1924 年まで日本はシベリア出兵を行うわけですが、この時期、日本のシベリアへの干渉は少数民族への援助という形でも行われました。シベリアにおいて有力な少数民族であるブリヤートもその援助の対象となりました。これは残念ながら後に多くのブリヤート人が「日本のスパイ」だったとして 1930 年代に粛清されていく遠因にもなっていきます。

また日本が 1932 年、中国東北地方に建国した満州国にもロシア革命を逃れてやってきたブリヤート人が住んでいました。総人口にして 3,000 人ほどでしたが、満州国軍には少なからずブリヤート人がいましたし、中には最後に陸軍中将にまでなった者もいます。また、この時代に日本式の教育を受け、さらに日本で学んだ方もたくさんいます。作家の司馬遼

太郎先生が『草原の記』の主人公として書かれたツェベクマさんもそのような方の一人です。戦後 60 年目となり、その世代の方はいまやだんだん消えつつありますが、ブリヤートの歴史の中で日本とはそれほど大きな存在であったのです。

第二次世界大戦後にソ連に抑留された日本人の中には、ブリヤートの各地へ送られた方々がいます。ウランウデ市のオペラ劇場もそうして送られた日本人によって建てられたものだと聞いています。こうした苦しい状況にあった日本人たちに同じ仏教徒として何かと助けたブリヤート人がいたことは、ブリヤート人からも、日本人からも聞いています。

モンゴルでも、ブリヤートでも、日本は第二次世界大戦中敵国であったにもかかわらず、日本に親近感をもっていらっしゃる方がたくさんいます。同じアジアの国として、また同じ仏教を信じるものとして、経済的に豊かな日本にあこがれているという方に少なからずお会いしました。ブリヤートと日本の間にも、未来に向けた交流が始まっています。

ウランウデにあるブリヤート国立大学と日本の山形大学の間の文化的学術的交流もそのひとつの例といえると思います。また、経済的にもガスパイプラインができれば日本との関係はより深まるかと思われます。

観光に関しても、日本・ブリヤート間の交流における重要な要素となるように考えます。少し南のモンゴルには近年、1 万人近い日本人観光客が訪れているからです。なお、モンゴル運輸省のデータを見ると、全体では 20 万～30 万人が訪れているようです。

モンゴルの首都ウランバートルからウランウデまでは飛行機でも 2 時間かからない距離にあります。シベリアの広さの中では、ちょっと足を伸ばせば届く距離であるということです。そこで質問なのですが、モンゴルを通り、モンゴル各地に散らばる日本人旅行客をブリヤートへ呼び込めれば、アイダエフ市長のお話になったとおりに観光客の数が格段に増えると思うのですが、この点に関して市長はどのようにお考えでしょうか？また、モンゴルを通ってやってくる日本人観光客に対してブリヤートが魅力的であると主張できるものはなんでしょうか？ブリヤートでぜひこういったものを見ていただきたいということがありましたらお伺いしたいと思います。

また、かねてから考えていたことなのですが、ブリヤート人の言葉、ブリヤート語は日本語に文法的に似ており、ロシアにいるさまざまな民族の中で日本語の習得をブリヤート人に有利にさせているように考えます。現に、イルクーツク州では、大学で日本語を教える先生にブリヤートの方が多くいます。また、仏教を信仰する人々が多いという共通点もあり、考え方もほかのロシアに住む民族よりもより日本人に近いと感じます。そこでブリヤートは文化のうえでも言語の上でもロシアの中で日本との伝達者としての位置を占める可能性があると考えますが、この点に関して市長はどのようにお考えでしょうか？

ロシアのシベリア・極東地域はこれから日本にとってますます重要な地域になると思います。その中でブリヤートはどのような地位を占めるのか、あるいはわれわれがどうブリヤートの人々と交わっていくべきなのかに対してアイダエフ市長のご発表は非常に参考になったと思います。われわれがブラート、つまり兄弟として、交流が盛んになることを祈

念します。

アイダエフ

外国人旅行者がブリヤートのどこに魅力を感じているかといえば、まずバイカル湖です。世界の淡水の 70%がバイカル湖の水で、世界で一番深い湖です。残念ながら、このバイカル湖の魅力は現時点で十分に活用されていません。バイカル湖観光のインフラはまだ不十分です。モンゴルの歳入の 4 分の 1 が観光収入であるという事実は、うらやましいと思います。ビジネスとしてのツーリズムが速いテンポで発展し、私たちも習いたいと思います。山形の市長、留萌の市長にお会いし、明日は新潟の市長とお話しますので、モンゴル経由でブリヤートへ日本の観光客に来てもらう提案をしたいと考えています。バッチジャルガル参事官がおっしゃったように、モンゴルのホブスゴル湖とバイカル湖を結ぶアイデアに賛成します。イルクーツクと日本の航空路の活用も重要です。

大量の観光客を受け入れる準備は十分にできていません。ウランウデにいくつかあるホテルは最大で 4,000 人規模のものがありますが、夏場は満杯に近い状態で、急な訪問者への受け入れ準備ができません。現在、モスクワの複数の企業と観光促進プログラムを協議しており、バイカル湖周遊や宿泊施設を含めた観光プログラムを充実させていきたいと考えています。モンゴルを通じて日本からの投資が来る可能性もあります。

日本の企業化がロシアになかなか投資をしていない理由として、政治的に安定していなかったことがあることは周知の事実ですが、プーチン大統領が就任してから状況は大きく変りました。トヨタがカムリの製造工場をサンクトペテルブルクに作ることが決まりました。G8 では、今年 11 月にプーチン大統領の訪日が発表されました。今後ますますチャンスが大きくなると思います。

コヴィクタ・ガス田からのパイプラインがブリヤート共和国南部を通って日本まで到達するという可能性があります。現在、ウランウデにはガスは引かれていません。暖房はすべて石炭を燃料にしています。この面でも今後、大きな将来が開けるものと思います。

プシェニチニコワ

日本の伝統文化はロシアでもよく知られており、文学、映画、演劇などの愛好家がたくさんいます。こうした交流をより活発にし、お互いのことをよく知っていけば、経済や社会的な問題も解決していける手立てとなり、北東アジア全体の関係がより密になっていくものと思います。知的ツーリズムを通じて魅力的なことがたくさんできると思います。

窪田

日本語を勉強した後、それを生かしていく手段があるのでしょうか。

アイダエフ

日本語教育を受けている学生は25人で一つのグループを作っています。日本語教育を修了すると、2つある日本語学校の教師なることに限られています。日本企業の事務所などはまだありません。

中村正董（帝京大学教授）

私は以前、新潟大学の国際センターにおりましたが、新潟大学には多くのロシア人、モンゴル人の留学生がいます。大相撲ではいま、モンゴルとロシアの人がリードしている感じで、それが親しみを増しているようです。ブリヤートでは大相撲が放送されたり、相撲をとっていたりするのでしょうか。

また、ブリヤートの輸出品目で機械というのは、具体的にどんな機械でしょうか。

アイダエフ

モンゴルの力士はブリヤートの力士に比べ大きな成果を上げています。現在18歳のブリヤート出身の力士がおり、12歳で来日し、7年目になります。大きな期待が寄せられ、先日2年ぶりに帰郷しました。ウランウデでは国技の格闘技があり、テレビでも中継されるなど高い人気があります。私たちは相撲もそのバリエーションの一つと考えています。18歳の力士が帰郷したときもテレビ放映され、一躍ヒーローとなりました。

現在、最大の輸出品目は石炭です。良質の石炭です。私が申し上げたのは、日本からの輸入に機械が多いということです。主に乗用車で、ブリヤートの人が個人で所有する乗用車の7割が日本車で、その次が韓国車です。

谷浦孝夫（共栄大学）

モンゴルの経済特区の成果について教えていただきたい。

バッチジャルガル

モンゴルの経済特区とは、所得税を減免し、土地の使用料を軽減する一定の地域をモンゴル国家大会議で定めるもので、自由貿易地帯と呼んでいます。モンゴルの北、ブリヤートとの国境のアルタンブラグ自由貿易地帯は2002年6月に定められ、現在建設が進められているところです。

吉田進（ERINA理事長）

ブリヤート、モンゴル、内モンゴル3地域の首脳、特定の市長間で定期的に打合せをするような機会があるでしょうか。経済的にはボーダレスに発展していますが、中央政府から見ると、あまり地域同士が近くなりすぎないようにと制限が入り、経済交流を妨害するようなケースがありますが、そのようなことはないでしょうか。

アイダエフ

ウランウデは 4 つの姉妹都市交流を行っています。内モンゴルのフフホト、モンゴルのウランバートル、ダルハン、エルデネットで、ウランウデの対外関係局がセンター機能を果たし、定期的に相互訪問しています。連邦政府は友好交流について一切、異論はありません。台北については外交関係がありませんが、国内法に基づいて市長たちが直接交流する権限を持っています。